

2022年1月5日発行  
日本比較文化学会関東支部

2021年度第2号のレター発行となります。本号では、2021年12月18日（土）に東京未来大学（遠隔会議室）にて開催されました「第54回関東支部例会」での支部会員の発表要旨について掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 郭 潔蓉

### ◆第54回 関東支部例会 ご報告◆

2021年12月18日（土）、東京未来大学・遠隔会議室（zoom）において第54回関東支部例会が開催されました。当日は6名の支部会員による研究発表が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な合同例会となりました。以下、例会での会員の研究発表の要旨を掲載致します。

#### ◆開会の挨拶： 関東支部 支部長 近藤俊明（東京未来大学）

#### ◆研究発表：

##### 1. 夏目漱石の「自由恋愛」観

##### —『それから』と『門』を中心に「誠実」と「世間」という観点から—

木下 哲生 防衛大学校 准教授

日本人が理想とするコミュニケーション方略の1つとして、「集団内の和を保つことを最高道徳とする」ということが考えられる。それはすなわち、所属する集団に家族同様の擬似血縁関係に基づいた「互いにお互いの好意を当てにして行動することができる」という「甘えの関係」を構築することを意味する。

お互いに甘え合うことによる共倒れを防ぎ、集団を維持していくためには、「皆が誠実に分を尽くし分を守る」「集団の最大公約数的利益のために、成員すべてが少しずつ我慢し、困ったときはお互い様で相互扶助する」の2つに基づいた「平等意識」が必要となるとされている。ここでいう「分」とは「所属する集団から認められた行動の責任範囲」ということであり、その遂行に一生懸命に取り組むことが要求される。たとえ達成できなくても責められることはなく、困難な際には「お互い様」で相互扶助を期待することもできる。

『それから』の主人公代助は、いわゆる「高等遊民」であり、大学卒業後も職に就かず父からの支援で日々好きなことを楽しんでいるが、長井家においてはそれが許されていた。それは代助が代助なりに長井家に「誠実」であったためである。しかし親友平岡の妻三千代を結果的に奪って結婚するつもりだというのが、平岡から長井家に伝えられるとその評価が一変する。本人たちの幸せなど一顧だにされず「世間に顔向けできないようなことをした」ということで義絶され生活の糧を絶たれてしまう。代助は「分を超えた」ことをしてかしたと判定されたのではないか。

『それから』の続編ともいえる『門』においては、そういう経緯を経て結ばれた夫婦が、一切の支援を受けられずひっそりとさして楽しくもなく生きていく様が描かれている。文中で宗助が参禅を終え、

寺を退出する際の「甍を圧する杉の色が、冬を封じて黒く彼の後に聳えた」という描写は彼等夫婦のこれまでの過去の経緯に閉ざされた世間の冷たい壁を想起させる。

夏目漱石は大正デモクラシーで政治や経済で自由を謳歌する傾向のある日本社会を見て、「日本では自由自由というが、究極の自由である恋愛さえも自由にできないし、まして自由恋愛の小説を書くことなど思いもよらない」ということをこの2作を通して述べたかったのではないだろうか。

## 2. 『ノルウェイの森』における性的描写の中国語訳に関する一考察

周 鈺 国際基督教大学 博士課程

1987年に出版された村上春樹の長編小説『ノルウェイの森』は累計1000万部を突破するという爆発的な売り上げを記録し、日本国内だけではなく、数多くの翻訳を介して世界中で読まれている。特に中国語圏においては複数の中国語訳が刊行され、読者に愛読されているとともに、研究者によって盛んに議論されている。中国では、翻訳者の林少華と頼明珠のそれぞれの中国語訳に関する比較研究が活発に取り上げられているものの、異国化、自国化、等価理論など代表的な西洋翻訳理論をベースにし、林少華訳と頼明珠訳から具体例を選び出し、翻訳者各々が重視する翻訳観念に基づき、誤訳及び翻訳ストラテジーをめぐって比較研究を行ったものが圧倒的に多い。性的描写は儒教文化の影響が強い中国では様々な制約が課されているため、そのような側面からアプローチする中国語訳に関する研究が十分に行われていないことが自明である。

本研究は『ノルウェイの森』に頻繁に登場する性的描写に焦点を合わせ、原作における性的描写が物語の展開において担っている役割に言及したうえで、中国語訳者の中国本土の林少華の1989年版と2001年全訳本、台湾の頼明珠の1997年版を研究対象にし、原作と照らし合わせながら、異なる中国語訳における相違点を検討する。性的描写に対して、訳文産出過程において、どのような翻訳ストラテジーが翻訳者に採用されているのか、それによって適切で質の高い訳文を得られているのかを明らかにする。異なる翻訳ストラテジーの選択が訳文の完成にどのような効果をもたらすのか、さらに個性的な彩りを帯びた中国語訳が原作理解にどのような影響を及ぼしているのかを掘り下げて考察することを目的とする。

## 3. 保育現場におけるステレオタイプの考察 —フィンランドと日本における比較から—

三井 真紀 九州ルーテル学院大学 准教授

本研究は、保育現場（保育所、幼稚園、こども園等）におけるステレオタイプ（Stereotype）に目を向けることを通して、保育における子ども像を明らかにすることを目的とする。

報告は、2018年3月から2019年11月に実施されたフィンランドにおける現地調査データをもとに、フィンランドと日本の保育現場の様相を比較し、保育現場のステレオタイプに注目して分析を進めた。その結果、保育目的、保育内容、保育方法などは、保育者のもつ子ども像と相互にかかわりあっている実情が明らかになった。また、保育の実態に目を向けた時、期待される子ども像の違いが明らかであった。本報告では、過度に一般化された子ども像（ステレオタイプ）の危険性について検討することはもちろん、保育現場に無意識的に作り出された保育者側の「良い子」像が存在しているという事実を目を向け考察したい。保育現場に存在するさまざまなステレオタイプを概観していくと、決して正確ではない子どもの姿や、科学的な根拠のない事象が、保育実践に反復されている課題がある。それは、保育者の振る舞い、家族支援の在り方、子どもの発達観にも当然大きく影響を与えていくといえるだろう。本報告を通して、社会の中の子ども像、ひいては社会からの子どもへの「まなざし」を問い直していく。

#### 4. 日本と韓国の「対北放送」による北朝鮮報道

田中 則広 淑徳大学 准教授

北朝鮮国内を聴取対象地域に含む「対北放送」の報道の特徴について、2021年1月から4月までの4か月間、日本と韓国の公共放送が実施する2つのチャンネルを取り上げて検討した。具体的には、NHK（日本放送協会）が運営するNHK WORLD-JAPANのコリアン・サービスで放送しているストレートニュースと、KBS（韓国放送公社）が運営する韓民族放送のストレートニュースを、北朝鮮関連のニュースに限定して報道内容について分析した。その結果、双方の北朝鮮報道には明確な違いがみられた。NHKはミサイルの発射といった国際的に注目されるニュースについては大きく伝える反面、一般的に関心の度合いが低いと考えられる出来事についてはニュースとして取り上げないというスタンスを取っていた。ただし、北朝鮮による日本人の拉致問題のニュースに関しては例外であった。その一方で、KBSは韓国政府の様々な機関からの情報を多用しながら、より細部にまで踏み込んだ内容を伝えようとする姿勢がみられた。また、NHKとは異なり、北朝鮮関連のニュースをニュース項目の上位に持ってくる傾向があった。

#### 5. 日本と台湾との比較基層文化に関する考察

滝澤 雅彦 日本大学 教授

ある国や地域の文化には、時代と共に変化し、時代を反映する文化としての表層文化と、長い世代にわたり持続し、伝承されてきた文化としての基層文化がある。このうちの基層文化について、新たな視点から日本と台湾を比較してみることで、それぞれの文化の持つ特徴と全体像が見えてくるのではないかと考え、本テーマを設定した。

日本文化について、その基層文化に関しては、これまで多くの研究がなされており、学校教育をはじめ広く共通理解されていることがある。それは、大陸から日本列島が切り離されてからの長い旧石器時代を経て、縄文時代、弥生時代、古墳時代のそれぞれの時代の中で形成されてきた文化であり、これらの中でも縄文文化は、日本の基層文化の中心として位置付けられているというものである。そして、その後、各時代の推移と共に、それぞれの時代の文化が蓄積され構造化されてきたものが、現在の日本文化の全体像であると考えることができる。

一方、台湾の文化について、その表層文化に関しては、日本では各種メディアだけでなく各種SNSでも、さらに直接訪れることによって一定のイメージが形成され理解されており、各表層文化の側面からのアプローチによる研究も行われている。また、基層文化については、台湾のエスニック構成の約2%を占める原住民族群の原住民文化を、台湾の基層文化と位置付け、各部族に関するフィールドワークによる様々な研究も行われてきた。

本考察では、この台湾の基層文化について、従来の視点に加えて、明・清の時代に中国大陸からの移民が持ち込んだ中国大陸南部の文化及び客家の文化もその構成要素と考え、そのうえで、台湾文化の重層構造について日本文化との比較を試みたい。

#### 6. 郷土料理・伝統菓子を活かしたクルーズ振興策に関する考察 — 日本海沿岸地域の港湾を中心に —

長田 元 富山短期大学 講師

旅行における食事は、先行研究が示すように旅行の満足度を高める重要な要素となっている。本研究が対象とする日本海沿岸地域の港湾の背後地は、多様な観光地や食文化が根付いている。クルーズ

旅行においては、寄港時の物販、下船し市内を観光するオプションツアーがあり、食事同様、旅の満足度を高める手段の一つとなっている。

こうした中、クルーズ振興に郷土料理・伝統菓子を活用する研究は十分に行われておらず、クルーズ振興を行う行政機関、クルーズ船を運航する法人、菓子製造にかかわる機関への聞き取り調査を行い、郷土料理・伝統菓子を活かしたクルーズ振興の可能性と課題を明らかにした。

本研究では、対象地域・港湾を山形県(酒田港)・新潟県(新潟港)・富山県(伏木富山港)・石川県(金沢港・七尾港)・福井県(敦賀港)として、郷土料理等の特徴の整理を行った。次に、各港湾の取組みや郷土料理・伝統菓子を活かしたクルーズ振興の可能性について、各行為体への照会結果をまとめた。

結果、多くの港湾、行為体から1. 郷土料理・伝統菓子を活用することに対する肯定的な見解、2. 地域の伝統菓子や特産品を寄港時に提供するといった特色ある取組み、3. 伝統菓子の一層のPRを行うおうとする地域の取組みを明らかにできたが、4. 地域における取組みの差異、新型コロナウイルス感染症対策、地元の受け入れ態勢や設備も認められた。

考察として、郷土料理・伝統菓子をクルーズ振興に活かす意義、各行為体から提示された課題に対する対応策を検討した。結論として、新型コロナウイルス感染症対策を踏まえつつ、郷土料理・伝統菓子といった地域文化の伝承とクルーズ振興の両立を図ることの意義を明らかにした。

※本研究・発表は日本海学推進機構から令和3年度に「日本海学研究グループ支援事業」の助成を受けたものである。

#### ◆閉会の挨拶： 関東支部 副支部長 花澤 聖子（神田外語大学）

#### ※連絡事項

次回の第55回関東支部例会は2022年3月の開催を予定しております。また、支部例会終了後、2021年度の関東支部総会の開催を予定しておりますので、会員の皆さまのご参加をお願い申し上げます。